

琉球大学学術リポジトリ

写真や図を中心にみる琉球の農作物主要病害虫 (22)

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学農家政学部 公開日: 2011-07-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 田盛, 正雄, Tamori, Masao メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/20978

写真や図を中心にみる

琉球の農作物主要病害虫 (22)

病 害

サトウキビのパインアップル病とパインアップルの基ぐされ病

宿 主 サトウキビ、パインアップル、バナナ、ココヤシのほか、多くの熱帯果樹や野生植物をおかす。

発 生 おもに傷口から宿主に侵入する。高温排水不良、空気の流通が悪いときなどには、よく発生する。

病 徴 サトウキビ：サトウキビでは、おもに植え付け間もない苗の中心部に発生し、そこは黒色になって腐る。発病の初期には、しばしばパインアップルに似たかおりを出す。

パインアップル：この病気は、パインアップルの苗の基部（基ぐされ病）葉（葉白斑病）果実（腐敗病）に発生する。苗の基部では、発病部分が腐ってやわらかくなり、黒色の胞子のかたまりがみられる。葉では、コムギ色の病斑ができる。果実では、しんや果肉が軟腐して黄色になり、古くなると灰色あるいは黒色に変わる。未熟果、成熟果いずれにも発生し、おもに果実の基部からしんの部分をしだいに上方へ円すい形に侵入していく。病状がひどくなると、果実の内部の汁液が流出して少なくなり、繊維だけ残してほとんど空になる。

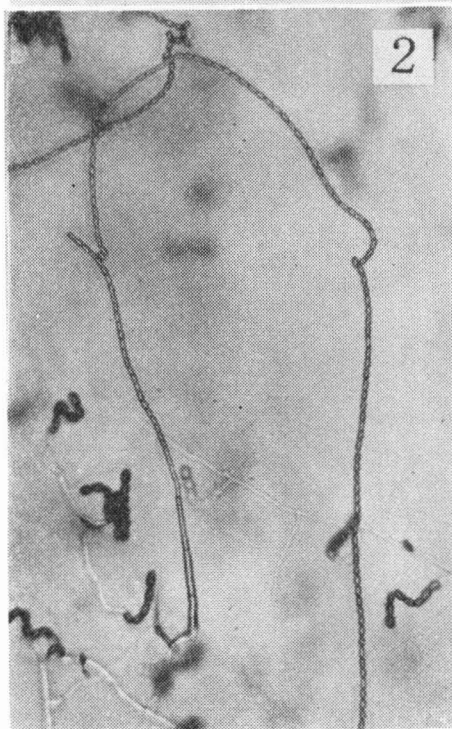
病 菌 サトウキビのパインアップル病菌とパインアップルの基ぐされ病菌は同一菌である。この菌は、小胞子、大胞子、子のう胞子をつくる。小胞子は長方形あるいは卵形で、膜はうすく、普通は無色であるが、宿主組織の内部では、やや着色するものもある。大きさは $10\sim 15\times 3.5\sim 5$ ミクロン。内生的につくられ、分生子こうからでて長くつらなる。大胞子は、大きくて、やはりくさり状につくられる。球形あるいはだ円形、膜は厚く暗色で、大きさは $16\sim 19\times 10\sim 12$ ミクロン。

防 除

- 1, 畑は排水をよくする。
- 1, 苗は水銀剤で処理して植える。



1 基ぐされ病にかかったパインアップルの苗



2 病原菌の小胞子（パインアップルの苗から分離した。一五〇倍）



3 病原菌の小胞子（パインアツブルの苗から分離した、一五〇倍）



4 病原菌の大胞子（パインアツブルの苗から分離した、一五〇倍）

（田 盛 正 雄）

（4 ページのつづき）

ることだろうから、各種牧草の特性を生かした土地の利用法を考えるべきではなからうか。

例へば、バラグラスは湿潤すぎて他の作物の栽培できない土地でもよく生育するし、バッフェログラスは砂地の乾燥地でも適するようであるから、その土地の土壤に適した品種を選定して土地を少しでも有効に利用する必要がある。

また、放牧地は格別かまう必要もない、或はかまう価値のないものときめてしまうのは大いに早まった考えである。放牧地は本来はきわめて広さまざまな用途或いは利用のしかたがあるのであって、用いようによつては他のどんな作物がよくできる畑地にも決して勝るとも劣ぬはたらきをするものである。

元来、私達は「放牧」といえば、すぐ「粗放なやり方」ということが頭にくるのが普通である。その際私達の考え方では粗放＝粗末ということになり勝ではなからうか。

しかし、これはいうまでもなく間違いで粗放と粗末は言葉は似ているが意味は全く別である。放牧は手間はかからないが、それだけ頭は十分に使わなくてはならない。いうなれば労力的には粗放な、しかも頭腦的には集約な方法なのである。土と草と家畜との働をよく理解して、これをうまく組合せ、その総体的な生産力を発揮させる。しかも人は主に頭の働きを以つて家畜、草、土そのものの自然の働きを調節しながら進行させ、敢てそこに自らの体力をただ一途に注ぎ込むことは要らない。そこに放牧というものの本来の意義の少なくとも一面が認められるのである。

（宮 城 常 夫）